II章

街に暮らす

我が街の素顔

新しい地図を開くと、つい自分の街をさがしたくなります。
「あっ、あった」あって当然のことなのに
見慣れた地名がきちんと印刷されているのを知ると、ほっとしたりします。
地図の上に見つけた自分の街は、特に変わったようすもないのに、
そこだけがほかの街とはまったく違って見えたりします。
地図の上に表された道路や家に、
暮らしている人にしかわからない、その街の素顔がダブるからなのでしょう。
そんな中区の隠された素顔をさがしに、街を歩いてみました。
面積一九、二〇〇、〇〇〇平方メートルの「中区」は、
いくつかの個性的な街に分けられます。
関内・山下町、関外、野毛、山手、元町・石川町、新山下・北方、本牧、根岸。
これらの街の素顔は、そこに暮らし共に街を創ってきた人々の素顔でもありました。
変わりゆく街の現実を見つめ、ある時は昔を懐かしみながらも
もっと暮らしやすい街にするにはどうすればいいかを、
どの街も模索しています。
そして、誰もが、それぞれの街の素顔を愛しているのです。

関内・山下町

開港時の居留地は今やすっかり神奈川県の心臓部

「このあたりは関内牧場とよばれていてね。カマボコ兵舎が建っていたもんだよ。残っていたのは横浜宝塚劇場だけでね。それがこんなに変わるとは、夢にも思わなかったね。」戦前から商売を続けている商店主はこう言って目を見張る。

いま関内は、中区というより横浜市、神奈川県の心臓部である。日本大通りには県庁をはじめ官公庁が、周辺にはおもだった企業をはじめ銀行、保険会社などが立ち並ぶ。

ウィークデーの昼間、この街の人口は何倍にもふくれあがる。しかし、それはオフィスの中でのことだ。「昔は弁天通りがいちばんの商店街でね。外国人がよく買物に来たものだよ。でも、いまはそのムードがなくなって、昼間の街になってしまったね。」と商店主はふり返る。

馬車道にある太陽の母子像は、アイスクリーム発祥の碑でもある。

連合町内会長が語る
我が街の自慢・我が街の名物

●文明開化の活気そのままの馬車道

横浜に外国人が住むようになって、いちばんにぎわった通りが馬車道である。自動車がまだ走ってない時代、外国人の乗る馬車が激しく往来したので馬車道というのだ。街の活気は、馬車の時代のままで、アンティックなデザインの街灯とおしゃれな電話ボックスが楽しい。

●絵タイルが案内する〝楽しい横浜〟

関内駅に着いたら、足元の絵タイルにびっくりするだろう。苦労して敷きつめた絵タイルが、関内、石川町、桜木町の各駅から山下公園に向かっている。観光に訪れた人をさり気なく案内するこれは、ハマッ子のイキな心づかいのあらわれである。

●牛や馬のための水飲み場があった

馬車道十番館の前に、牛や馬を休ませる水飲み場があった。今は記念槽が残っているだけだが、タイルの表面には「牛馬飲水」の文字が刻まれている。

●アイスクリームはここで生まれた

明治二年、馬車道の氷水屋さんが、「あいすくりん」を売り出した。あいすくりん――いうまでもなく、アイスクリームのことだが、冷たく甘い味に、さすがのハマッ子も目をパチクリ。日本のアイスクリーム第一号には、青山のハーゲンダッツもホブソンズもかなわないだろう。

●日本一古い洋品店

創業が慶応二年という洋品店が馬車道にある。お侍がチョンマゲを結っていた時代に洋品を扱ったことになる。初めは洋品の輸入だけだったが、横浜にはすでに大勢の外国人が住みついていたから、開業できたのだ。

人波が途絶えないのは馬車道ぐらい。一歩裏に回ると、人通りがぱったり途絶えてしまう。車が行きかう程度だ。若者の姿はほとんど見られない。

馬車道の商店主に聞いてみた。「ここは高級品が多いんです。いい品物があって、いいお客さんが多い。中年向きの街とでもいえるでしょうかね。」

商店街の活性化が大きな課題である。その一つが、弁天橋と大江橋の中間に新しい橋を架けることである。「戦前からの話でね。ようやく橋を架けることになったんです。橋を架けて、桜木町からの客を引っぱってこようというのがねらいなんです。」と言う。

またスタジアム通り振興協議会なるものもできた。これは桜木町から関内を通って横浜スタジアムへという人の流れを確保しようというもので、街灯などを増やして明るくし、街並の景観を変えていくことも考えている。特に、裏通りの整備に力をいれていこうというのが、関内商店街の総意であるようだ。

七時を過ぎるとオフィスの灯が消え、店も次々閉まっていく。オフィスの人々が家路についた後、かわりにまたたくのが高級クラブ街のネオンだ。「帰りに一杯、とはとてもいかないような高い店ばかり」が軒を連ね、黒ぬりのハイヤーが街を行きかう。関内は、夜の政治経済の中心でもあるわけだ。

ここに暮らしている人はわずか二、八五五人。しかも年々減っているという。暮らす街というよりは、開港以来の伝統的な業務、商業地区である。

日本大通りの南側、山下公園や中華街に足を向けると、ようすがガラリと変わる。もともと外国人居留地としてスタートしたこの一角は、街のあちこちに外国人との深い関わりがそのまま引き継がれている。

特に中華街。碁盤の目のような街づくりのなかで、ここだけが北に傾いたように斜めに道が走る。住民のほとんどが中国人だ。

「ここは明治以来中国人の居住地でね。最初に住みついたのがコックさんといわれているだけに、味は保証つき。中国人の食べ物に対する熱意のほどがわかってもらえるはずです。」と言うのは関口さん。また、「味を楽しむばかりでなく、中国語の勉強に来ている人もいるみたいですよ。」という声も。

中華街で毎年10月1日に行われる国慶節祝賀パレード。

電柱までが赤く染められ、裏通りでは、どんより脂まじりの空気の中を香港の最新ヒット曲が流れる。ここには、衣食住のすみずみにまで、中国の生活がそのままの形で息づいている。

外国商社が古いまま残り、中華街を中心にかかえる山下町は、歩いてみた限りでは、日本人とか外国人とかいった国籍を越えてインターナショナルな活気がみなぎっている。ただし、ここでも暮らす人の数は年々減少傾向にある。観光地としては栄えても、暮らしていくには適さなくなってきているのかもしれない。

開港と同時に人工的につくられた関内、山下町。どちらも表の顔が先行して、住民にとっては暮らしの場ではなくなってしまったのか。

長老の一人は「かつては、ひとつの大きなつながりをみせていた地域ですからね。今では、はっきり色分けされてしまいましたが、両者とも中区、いや神奈川県にとって欠かすことのできないものなんです。特に、山下町の街並整備に力をいれてほしいんだが。」と言う。

中区の中心地として、裏通りを主体とした整備が必要になっている。

関外
明治から戦前までの一大娯楽街復活まであと一歩

関外はもともと娯楽の街として出発した。なかでも吉田橋で関内、馬車道とつながった伊勢佐木町は横浜でもっとも早く発展し、今日までザキの愛称で親しまれている。

伊勢佐木町という町名の由来には諸説あって、なかでも、もっともそれらしいのは、伊勢文蔵と佐々木次平埋立て説だ。この二人、江戸の末期に沼地だったここを埋立てて一大興行街にしようと計画。莫大な借金をして実行したもののお化けが出るとか狐が出るなどの噂が飛びかい、訪れる者とてなくついに自殺と相なった。

ところが異なもの、二人の死のすぐ後、ここはめざましく発展し、哀れに思った役人が二人の名を町名に残したのだとか。

事の子細はともかくも、明治の昔から戦前まで、伊勢佐木町周辺は遊郭、芝居小屋、寄席、映画館と当時の娯楽をすべてそろえた一大アミューズメントセンターだった。

「ザキへ行こうというのが、私が娘時代の合言葉でした。一銭五厘のお金を握って、活動大写真を観て、弁士の声の大きさと、効果音の大きさとにはびっくりしたものですよ。」こう言って昔を思い出してくれたのは、七七歳になる吉田さんだ。

この繁栄も、戦争とそれに続く接収でストップ。関外全体がアメリカの街になり、若葉町には何と飛行場までつくられた。そして、解除。昭和二七年のことだ。「とにかくうれしかったね。昔懐かしいザキが復活するというのだから。皆で祝杯をあげたものだよ。当時は娯楽に飢えていたからね。」と長老。

連合町内会長が語る
我が街の自慢・我が街の名物

●ショッピングモールの代表は伊勢佐木町

銀座や新宿にもない独特のショッピング街が、伊勢佐木町モール街だ。しゃれたお店がズラリ、なにしろ伊勢佐木町一、二丁目がモール化されたのは、日本でも最初の方なのだ。一丁目から四丁目までタイルを敷きつめた歩道の両脇には、コブシ、エンジュなど一〇〇本近い樹木が植えられ、彫刻や時計塔、ユニークなデザインのベンチや街灯が、街の景観に彩りをそえている。うまい水も飲める。日本の名水六種の味が楽しめる「ウォー太君」と名づけられた給水器がそれだ。

●日本で初めての鉄の橋

吉田橋ができたのは明治二年、日本で初めてつくられた鉄の橋だった。鉄材はイギリスから取り寄せ、イギリス人技師によって完成した。

「関内」「関外」というよび名は、この吉田橋の関門を境にして地域を分けた言葉なのだ。

●芸術性の香り高い「火伏（ひぶせ）の神輿」

一〇〇基以上の神輿が町内をねり歩くおさん様の祭りで、ひときわ人目を引くのが「火伏の神輿」だ。

この神輿は、有名な彫刻家高村光雲の作で、うるし塗装も超一流の塗師が手がけたものだ。ふだんは県立博物館に飾ってあるが、祭りの日は〝ふるさと〟に帰ってくる。神輿の高さは二メートルを超すという堂々たるものである。また、光雲作の雌雄一対の獅子頭も飾るのだ。

●縁起のいい町名が集まっている埋地七ヶ町

埋地地区の七つの町にはおめでたい名前がついている。万代、不老、翁、寿、扇、吉浜、松影……長生きができそうな町名ばかりだ。

他の商店街に比べると遅いスタートではあったが、伊勢佐木町は興行の街から商店街になり、周辺が風俗営業、飲食、映画などの歓楽街として再発展への道を歩み始めた。

現在の伊勢佐木町は日本でも有数のモールとして整備された一・二丁目に続いて、三・四丁目もモール化されている。将来的には七丁目まで延長する予定でいるとか。

「はっきり言って、伊勢佐木町は市民の商店街といえるだろうね。吉田橋の向こう側は馬車道だから、高級なイメージがあるんだよ。だから皆が伊勢佐木町に来るんだろうね。」というこの声に代表されるように、ふだん着でブラリと来る人が多い。

だが本当に伊勢佐木町は復活したのだろうか？

「モール化したことで確かに客足は増えたけど、売り上げとしては年々下がっているぐらい。」という声もある。一歩裏通りに入ると閉店の看板を掲げたスナックもいくつか。「ここにきてスナックができすぎたんですね。多くなりすぎて商売ができず、閉店にするところが増えているんです。こういった点を含めて、モールの周辺をなんとかしなければと考えているのですが。」と商店主の一人は言う。

関外の実質的な地盤沈下は、商業だけに限らない。

「関外は静かというより、寂しい感じがするね。マンションが増えて、人と話す機会がめっきりなくなってしまったからね。公園などもあるが、遊んでいる人はほとんど見かけません。もっとにぎやかになれば、街全体が明るくなってくると思うんですがね。」という声も。

大岡川の川岸が遊歩道になったり、横浜文化体育館をはじめとする公共施設が数多く立ち並んでいるが、街に暮らす人、商う人にとっては、今一歩ものたりなさの残るところかもしれない。

市民の商店街・伊勢佐木モールはふだん着でブラリと来る人が多い。

大岡川の遊歩道は、住民の格好のジョギングコースになっている。

野毛

金はないけど心がある 新生に向かって 街ぐるみのスタート

ここの住民は一様に口をそろえる。

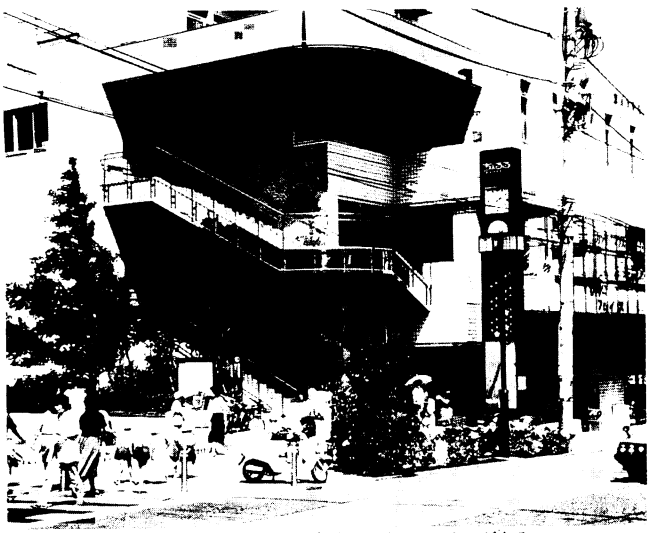
「金はないけど心があるからね。ここに住んだら他所へは行けないな。」

二カ月前にマンションに越してきたばかりという主婦にこの街の評価を聞いてみた。

「野毛と聞いて、ガラの悪いところという第一印象をもったんです。ですが、越してきてみて、その印象がまったく違うことがわかりました。下町のあたたかさというんでしょうか、親切なんですよね。まるで自分のことのように考えてくれるんです。ここに来て本当によかったと思っています。」

ここには昔ながらのあったかい下町人情が今もしっかり生きている。

だが一方で、野毛地区は、関内、関外の入口として、時代の困難にもっともまれてきた街である。



再開発でできた「ちぇるる野毛」には区内唯一の地区センターがある。

連合町内会長が語る 我が街の自慢・我が街の名物

●二人の〝お嬢さん〟が経営する飲み屋さん

「武蔵屋」は看板も出ていないシモタヤ風一杯飲み屋だけど、何といっても、七〇年の歴史が自慢だ。

この店の売り物は、六〇歳を過ぎて、今なおお色気いっぱいの〝お嬢さん〟二人。元美女のサービスにお酒もすすむけど、一人三杯でお断わりとのこと。お酒好きの人の身体を気づかっての親切心からだ。

●大物ジャズメンがたむろした「ちぐさ」

店のマスター、吉田衛さんは横浜文化賞を受けた有名人で、受賞パーティには、谷啓、石橋エータローをはじめ、大勢のジャズメンが集まった。

「ちぐさ」はジャズのメッカとして、日本中に知られた店で、かつてナベサダなど有名ジャズメンがたむろしていた。今でも、九州、北海道などからもジャズメンがよく訪ねてくる。ただし、この店のマスターはいばっており、お客の方が小さくなっているという、ヘンな店でもある。

●野毛にサーカス学校が

全国でも珍しいサーカス学校が野毛にある。校長のイクオ三橋は、火吹きで有名な大道芸人で、フランスに留学したこともある、この道の第一人者である。

●田辺屋の主人は門弟五、〇〇〇人をかかえる空手の先生

今川焼き屋さんで知られる田辺屋だけど、ここのご主人の空手はすごい。一時は五、〇〇〇人の弟子をかかえていたが、これだけの門弟をかかえる武道家は全国でも何人もいない。

●野毛から大臣が？　天宝堂のおじいさん

本屋さん「天宝堂」のおじいさんは、東大の法科を卒業している。末は大臣かと近所の期待を集めた人。だが、読書好きが高じて本屋になったという。

明治のころには鉄道やガス灯がここから生まれ、早くから庶民の街として栄えた。しかし、震災で丸焼けになり、ようやく復興したころに、今度は戦争。野毛もかなりの被害はうけたものの、関内と伊勢佐木町が接収されて、日本人が唯一楽しみながら大手をふって歩ける街として再浮上した。だが、その繁栄も束の間、昭和二七年、接収解除によって、また野毛の街は沈下してしまう。その上、戦後の混乱と後遺症を真正面からかぶった。

ある喫茶店のマスターは、

「明治から大正にかけてずいぶんにぎわったもの さ。でも、露店が廃止になってから、さびれる一方でね。ご覧の通りの状態なんだよ。」と言う。

マッカーサー劇場や浅草劇場があり、美空ひばりもここで初舞台を踏んだ。映画俳優なども住んでいたことがある。

だが、今の野毛を見る限り、そういった活発な動きは見られない。

今、野毛でいちばん求められているのは、街の活性化である。一時盛り上がった再開発気運も

春の野毛祭りに花をそえた大道芸のパフォーマンス。大勢の人がつめかけた。

「ちぇるる野毛ができて安心してしまった」そうで、中途半端に終わっているという声もある。

だが、ここは何度も沈んでは、庶民のパワーで浮上してきた街だ。戦後の暗いイメージからすっかり脱却したように、街づくりを考える会や野毛文化を守る会などがリーダーになって、自分たちの手でこの街を活性化させる方法を、今必死になって探っている。

そのひとつが、落語会や大道芸。これは二代目、三代目という若い商店主が中心になって行っているもので、今年四月の春の野毛祭りには、大勢の人がつめかけた。それに大道芸のパフォーマンスが花をそえた。

若者たちを中心としたこの動きは、老人たちにも火をつけつつある。長老の一人は、「年寄りのなかにも、若い人についていかなければという気持ちが強くなっています。ガンコすぎるのもいけないんですよね。そのガンコさが野毛の活性化を妨害しているようにも思うんだ。」と言う。年齢を越えて、野毛らしさを生かした活性化への取り組みが始まろうとしている。

野毛地区全体が生まれ変わるには、まだそうとうの時間がかかるだろう。ただ、この胎動は確実に伝わってくる。住民が自ら立ち上がった活性化策がどのような実を結ぶのか、特に注目したいところである。

山手

異国情緒漂う高級住宅街
ドライな人間関係が暮らしやすさのポイント

中区山手。豊かな緑の中に港の見える丘公園、外人墓地、そして古い洋館が点在する。明治のころから外国人が好んで住んだ高級住宅街であり、同時に土日ともなれば異国情緒を求めて、あちこちから人が集まる観光地でもある。

戦前の昭和九年から山手に住み続けているという萩原さん。山手の移り変わりを見つめてきた数少ない一人である。「昭和九年にはこの辺には家が一七軒ほどしかなかったんですの。とても物騒なところだったんですよ。」

戦争によって、ほとんどの家が焼けた。残ったのは萩原さんの家を含めて二軒だけ。フェリス女学院に進駐軍の司令部が置かれた。現在、日本郵船の寮になっているところは、茶屋だったそうだ。バスが登場したのは今から一五年前。坂道が多く

休日には、異国情緒を求める人々があちこちから訪れる。

連合町内会長が語る
我が街の自慢・我が街の名物

●フランス人が瓦を焼いた元町公園

元町公園一帯が開けたのは、一人のフランス人が商館の建物に合うように、西洋瓦を焼き始めてからだ。このあたりは、開港前はうっそうと草木の茂る谷で、二、三軒の民家があっただけという。

●山手の丘は女子学生の丘

横浜共立学園、横浜学院、横浜女子商業学園、フェリス女学院、横浜雙葉学園など、山手の丘には名だたる女子校が並んでいる。登校、下校の時刻には小・中・高・短大・大学生にいたるまで、華やかな女子学生であふれかえるほどだ。

●外国人が静かに眠る白い墓石

外人墓地は安政元年に事故死したアメリカの水兵を葬ったのが最初といわれている。今、ここに眠る外国人は四〇カ国、四、〇〇〇人以上になる。白い墓石には、十字架やお国柄を表す彫刻が刻まれている。

●夜のイルミネーションがステキな展望台

横浜港が一望できる丘の上にある、港の見える丘公園は昔イギリス兵舎だったところだ。芝生を敷きつめ、色とりどりの花壇をつくり、展望台を立てたら、ロマンチックな公園になってしまったのだ。

●山手の高級住宅地は、数年前で億ション

横浜共立学園のそばで売り出された建売住宅は数年前で一億円。当時としては珍しくて、大きな話題となった。

●日本初のシェークスピアを上演したゲーテ座

岩崎博物館の建つ場所には、昔ゲーテ座という劇場があった。ゲーテ座は、明治から大正にかけて日本の演劇界をリードした輝かしい歴史をもつ。明治三年にオランダ人によって建てられたゲーテ座は、外国人のための劇場としてスタートしたが、日本で初めてシェークスピア劇を上演するなど、その活動には目をみはるものがあった。

足の便が悪いというネックが、これで一挙に解消した。それからである、山手はガラリと雰囲気を変えてしまった。

今までの落着きが姿を消し、あわただしさばかりが目立つようになった。

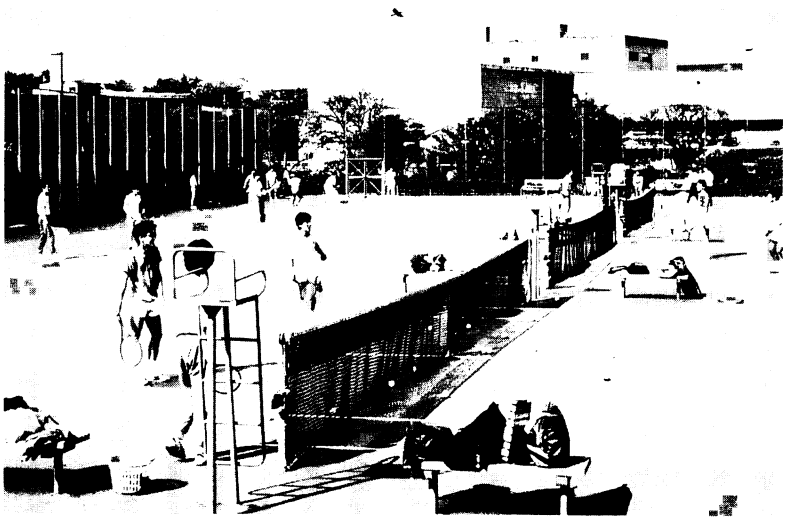
ここに住んで一〇年ぐらいの本多さんは「それでも五年ほど前までは、まわりにかなり空き地があったんですよ。大きな住宅が立て込んできたのは、つい最近のことなんです。」と言う。

山手の丘には、豊かな緑に囲まれた高級住宅が立ち並ぶ。

暮らす街として、この街はどうなのだろう？

「バスが一時間に二本しかないの。もうちょっと増やしてほしいわ。」「敷地が広くて家が大きいせいかしら。空き巣やドロボウに狙われやすいのね。近くに交番でもあればちがうんでしょうけど。ちょっと前まではあったんですよ。」

あとはおおむね満足といったところか。



日本庭球発祥の地でもある山手公園。

「下町に見られるような隣同士でお米を貸し借りするとかいったことはありませんね。皆が、金銭、時間、労働のことを考えて合理的に動こうとするんです。」

隣近所とのつきあいもほとんどないとか。それがまたここに住んでいる人にとっては、都合が良いようだ。

「お互いの生活に干渉することがありませんから、わずらわしさがないんです。何よりも、自分たちだけの生活ができることがうれしいわね。ふるさととしては最高じゃないかしら。」萩原さんと本多さんは、こう口をそろえた。

まわりには新しいマンションが建っていた。半年前に越してきたという主婦は、「この辺の人は何かエリート意識があるみたいね。何となく話しにくい感じがするの。でも、干渉しないということはいいことだと思うわ。ちょっと寂しい気がしますけどね。」と笑った。

表通りには、観光客の姿が絶えない。立ち止まってはカメラのシャッターを切っている。

バス停でバスを待っていた親子連れ。古い洋館にカメラを向けていたが、「こんなところに住んでみたいわね。でも無理でしょうね。」とささやきあっていた。

元町・石川町

最新ファッションと昔ながらの面影 二つの時間軸が共存

一三〇余年の昔、突然横浜村は日本の玄関口となった。大急ぎで村は街につくり変えられ、外国人と日本人商店の街になった。

横浜村にはもともと百数戸の住宅があったのだが、住人たちは新しい街のために強制移住の憂き目にあった。その移住先が元町である。横浜の本の村という気概が本村、元町の町名の由来だという。半農半漁の静かな村の住人たちは、田畑と海を失ってどうやって生計を立てていったか。彼らは商人と職人に転職した。それも外国人相手の。

というのも、ここは外国人商社の集中する山下町あたりと、外国人居住の山手とのちょうど中間地点に位置していて、外国人向けの新商売を始めるにはうってつけだったからだ。表通りには仕立屋、パン屋、唐物屋(洋品店)、それに西洋家具屋などが立ち並んだ。一方、裏通りは職人の街。外国人からさまざまな技術を教わった。その代表が家具職人であり、指物師、塗師、挽物師や椅子張りのバンコ屋などが集まっていたという。この家具は元町家具とよばれて、戦前まで日本全国に知られるほどの盛況ぶりだったとか。

現在の元町は、元町商店街に代表されるヨコハマ・ファッションのメッカである。

長老は、「昔の元町は落着いていて、風格のある街だったんですよ。元ブラといって、ブラブラ歩くことができたものね。夏になると昼下がりに人通りが途絶えてしまってね、皆が軽井沢の支店や店に行ってしまうんだよ。」とふり返る。今は元ブラなどとてもできない。下を向いた途端に人にぶつかってしまうほどのにぎわいである。

連合町内会長が語る 我が街の自慢・我が街の名物

●横浜で最後の椅子づくり職人

元町は家具で発展した町。ここの宮崎吉太郎さんは、横浜で最後といわれる椅子づくりの職人さんだ。明治四〇年生まれで今なお現役バリバリ。一二歳のときから磨きあげた木工技術は芸術品。細かい部分まで神経をつかってつくりあげた椅子は、いつの時代までも愛用できる逸品である。

●霊験あらたか、元町の厳島神社

元町四丁目と五丁目の境にある大きな赤い鳥居は、広島県宮島の厳島神社の分身である。元町では珍しい、歴史を漂わせている建物だが、受験、商売にご利益があるといわれている。ぜひ一度参拝してみてはいかが?

●元町の水は、二つの名泉で大丈夫

船舶に水を売っていた長塚良水という会社がつくったトンネルは、打越の霊水といわれ、関東大震災でも枯れることなく湧き続けたという不思議な水だ。このトンネルは人が立って通れるほど広いが、どこまで続いているのか誰も知らない。

元町にはもうひとつ、一〇〇年以上も経つのに、今なおこんこんと水が湧き出る井戸がある。打越の霊泉とこの井戸で非常時でも水が確保できるといわれている。

●濡れ地蔵の名前の由来

以前、字・渓(たに)といわれた急な坂の上に濡れ地蔵がある。現在は地蔵坂と改名されているが、濡れ地蔵の名前の由来がいろいろあっておもしろい。

濡れてもそのまま立っていたという説や、遊女が地蔵に願をかけて海に飛び込んだあと、地蔵に塩と昆布がついていたからという説がある。毎年八月二四日の地蔵会には、近県から六〇〇人を超える信者が集まってくる。

●高速道路の下で釣りができる

まったく風情のない高速道路だけど、堀川で釣り糸を垂れるのもおもしろい。今でもハゼ、ボラなどがよくかかる。

昭和六四年、石川町が共に歩んできた中村川の上に高速道路が開通する。

この華やかな喧騒をぬけ、石川町駅の方へ歩いていくと、商店街のようすが変わる。ファッションの店が減り、町場の商店と住宅が並ぶ。

ここ石川町は、港とそれに続く中村川と共に発展してきた街である。明治のころから昭和の初めにかけて、港に集まる物資が中村川を通ってこの街に荷揚げされた。川沿いには米、しょうゆ、それから石炭、木材にいたるまで、さまざまな問屋が軒を連ねた。その奥には港で働く人々の街があった。

今はもう問屋街もすっかり影をひそめ、暮らす人もずいぶん様がわりしたけれど、ここは今もある意味でもっともヨコハマらしい下町である。ハシケがたまり、小さな船がときおり行き過ぎる中村川には、そのころの名残りを見ることができる。

だが、ここにも時代の波は確実に押し寄せてきた。中村川の上に高速道路が通ることになったのだ。横浜市が市政一〇〇周年を迎える昭和六四年の完成に向けて、現在工事が進められている。

「今でも、亀の橋のたもとでとれたての魚を売ってたりするんだよ。昔からこのあたりは川と切っても切れない関係だった。でも、高速道路のおかげで、川もそれから空もふさがれちゃって、便利になるのはいいんだけど、やっぱり寂しいよね。」

消えつつある中村川の情緒を惜しむ声は、石川町のあちこちで聞かれた。

外から見ると、元町・石川町といえばファッションの街・女子学生の街というイメージが強いようだが、裏通りには昔ながらの面影が息づいている。変わりつつある顔といつまでも変わらない顔、この両方がここにはある。

開港当時からハイカラの最先端を走り続けてきた元町商店街。

新山下・北方

古い家並みに宿る あたたかい 中区の下町人情

この街には下町特有ののんびりさとあたたかさが色濃く残っている。ちょっと前までは、各家々の茶ダンスには隣近所の人の茶碗までそれぞれ置いてあるような街だったという。

新山下は震災前に埋立てでできた。そのころ横浜に港湾関係の工場を誘致して、工業地帯をつくる計画があって、そこに働く人たちの社宅が建てられる予定だった。けれども大正一二年の関東大震災によって、かわりに被災者たちを受け入れる住宅が建てられた。

現在ここは海側に倉庫、旧貯木場、山側に住宅とはっきり色分けされている。

コンテナトラックが走り、倉庫が群をなして、活発な動きを見せている海側とは逆に、山側にある住宅地は、狭い道路をはさんで、間口の狭い家

新山下は軒がふれあうようにびっしりと家が立て込んでいる。

連合町内会長が語る 我が街の自慢・我が街の名物

●北方はキリンビール発祥の地

横浜はうまい湧水の出るところが多いが、北方も湧水の豊かなところで、これに目をつけたのが、ノルウェー系アメリカ人のコープランドだ。「スプリング・ヴァレー・ブリュワリー」という醸造所を始めた。これが、のちにキリンビールの初期工場となる。

きれいな湧水をふんだんに使ったビールは、天沼ビアザケとよばれ、たちまち人気となり、関東大震災のときには、飲み水や風呂水のかわりになったという。

●町内会が早くにできた町

北方は、町のコミュニティ組織、町内会が早くにスタートした町である。ここで生まれ育った人が半分以上いるために、まとまりやすかったようだ。今でもマラソン大会、運動会などが町ぐるみで行われている。

●かつての小港は海外にも知られた歓楽街

小港団地のある小港は、大正時代は海外にも知られた歓楽街であった。チョップハウスとよばれる外国人相手の社交場のネオンが輝き、きれいどころがそろっていた。

横浜の男性たちにとっての〝遊び場〟としてにぎわったという。

●日本の国歌が生まれたお寺

妙香寺は「君が代」の生まれたお寺だ。妙香寺に行くと、入口に「君が代由緒地」という石碑が立っているのですぐわかる。妙香寺と「君が代」とのつながりはこうだ。

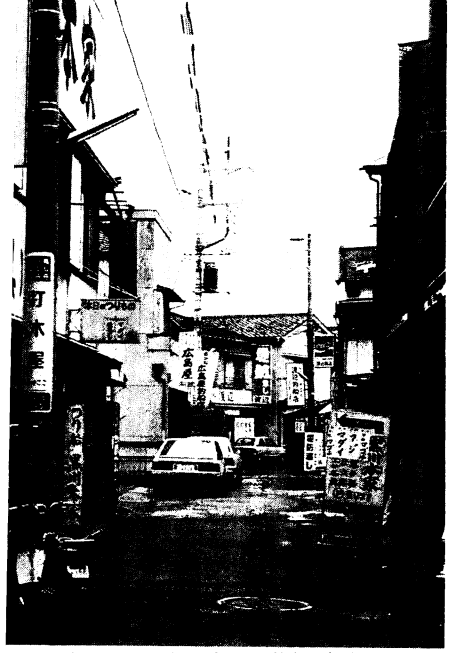
妙香寺にイギリスの軍隊が駐屯していたとき、そこの軍楽隊に薩摩藩の若い武士が音楽を習ったのである。そのとき、イギリスの軍楽長、フェントンが歌の意味もわからないまま作曲したのが、「君が代」であった。二分音符の単調な旋律を歌詞にあてただけだが、その後日本風にアレンジされて、現在の国歌となったのである。

並がぎっしり続いている。「なにしろ戦前からの建物が多いだけに、街並そのものが古いんです。何とかしなければと思うんですが…。」と言うのは八百屋の御主人。

ここに再開発の話がもち上がっている。だが、具体化しているのは新山下二丁目だけ。一丁目には計画があるだけだ。「二丁目は、地権者が少ないので、再開発の話がトントン拍子に進んだんですが、一丁目は地権者が二〇〇人ほどいて、なかなか意見が統一できない」というのがその理由だ。二丁目の上田さんは、「ようやく再開発されることになりましてね。戦後ずっと言い続けてきたんです。三階建てのビルも建つそうですし、この辺もすっかり変わりますよ。」と言う。

新山下にとって、住宅問題はひとつの大きな課題だった。その課題が解決される日も近い。

新山下の狭い道路を通り、見晴トンネルを南にぬけると北方だ。



新山下運河の河口近くには釣舟の店が並んでいる。

ここは、麒麟麦酒会社と共に発展してきた町である。その昔を懐かしむ声が、あちこちから聞こえた。

立ち寄った煙草屋のおじいさんは、「関東大震災のときに道路が地割れして、水がまったく出なくなってしまってね。そこで役に立ったのがビールさ。水がわりにビールを飲み、ビール風呂に入ったものさ。ビール風呂に入ったのは、あれが最初で最後だね。」と笑う。今となっては笑い話だが、当時は必死だったのだろう。「ここに住んでいる人の半分以上が、ここで生まれ、育った人」といわれるだけに、こういった思わぬ経験をした人も多いようだ。

街を歩くと高い建物は見あたらず、古い木造の家が多い。それにガケの上に建っている家も多い。いたるところに「急傾斜地崩壊危険区域」の看板が立っている。

長老の一人は、「小港には、海外にも知られた歓楽街があってね。若いころはずいぶん遊んだもんだよ。でも、その歓楽街がなくなり、麒麟ビールが移転してから、この辺はすっかりおとなしくなってしまったね。」と言う。

妙香寺の石段入口に立つ「君が代由緒地」の石碑。

だからといって、今の街をつくり変えようという意識はないようだ。

「ちょっと活気がないことは事実です。でも、ここで生活してみて、これ以上の街はないような気がするんです。街全体がひとつのつながりをもっていますから、この雰囲気をこわす必要はありませんよ。」と住民の一人。四〇歳ぐらいの婦人は、「なじんでしまえば離れたくないところね。田舎の人情味が残っているもの。ただ心配なのはガケ崩れね。ご覧のようにガケが多くて、その点が不安なだけ。」と言った。

半農半漁で栄えてきた北方地区。海はなくなってしまったが、今でもその当時の面影は、ここに住む人ののんびりした生活ぶりにうかがえる。

昭和五七年にようやく接収解除になった新山下三丁目、小港町二、三丁目の開発によってこの地区はこれから大きく変わろうとしている。しかしどんなに風景が変わっても、この下町は暮らす人から、まさにふるさととして愛されている町なのだ。

本牧

フェンスの向こうのアメリカが去って今、新しい街が生まれる

この街のほぼ中心には、つい五年前までアメリカがあった。フェンスの向こうに広がるそれは、良くも悪くもこの街の象徴だった。

地元の人は、「フェンスがあったとはいうものの、外国人と間近に話ができ、交流を深めることができたのはここだけだったね。戦後、外国文化をいち早く取り入れるようになったのもここだよ。」と自慢する。

本牧はもともと漁村だった。今は埋立てで、浜もなくなったけれど、外国人が好んで泳いだ海水浴場もあった。

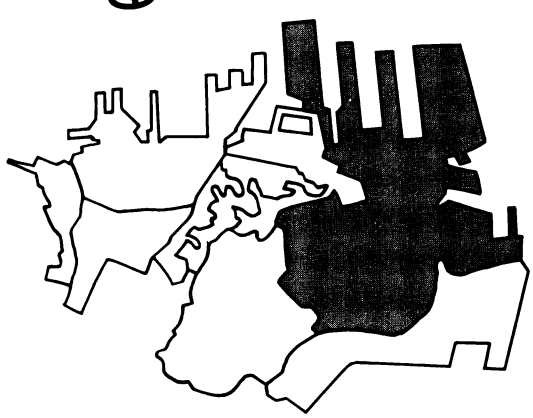
明治以前から海を介して外界とふれあってきたこの街には、何でも取り入れようという港町の気風がいちばん強く残っているようだ。

「港町というのは、古い人も新しい人もオールカマーなんだよ。そこにふさわしくない人は、一時的にオフリミットされるが、すぐ仲良くなってしまうものね。」

こうして本牧は、四〇年近く街の中の外国とつきあってきた。今ここにはフェンスもなく、基地もない。かわりに横浜スタジアム三四コ分にも及ぶ広大な土地に新しい街が生まれようとしている。

マンションができ、家が建ち、本牧の街はどんどんきれいになっている。住む人の顔ぶれも変わってきた。だが、昔の本牧を知る人にとっては、ちょっぴり寂しさもあるようだ。

「基地のことについてとやかく言っても仕方ないけどね。当時はもっとにぎやかで活気があったよね。ジャズやデキシーランド、ワルツの接点は本牧にあったし、アメリカの物資はすべて本牧で



連合町内会長が語る
我が街の自慢・我が街の名物

●三溪園の隣りが本牧（!?）

「本牧ってどこにあるの」と聞かれて「三溪園の隣り」と答える。本牧三之谷の誇りである。三つの谷にちなんで名づけられた三溪園は、野鳥、植物の宝庫でもあるが、明治時代の巨匠たちの美術品も数多く残されている。

●お城の形をした寿司屋さん

「本牧ブルース」を作詞した音楽家でもある人が経営する寿司屋さんはちょっと変わっている。三溪園の入口に一五年前から建っているお城が、実はお寿司屋さんなのだ。

●横浜のお金持ちが住んだ〝ビバリーヒルズ〟

野毛から見ると、本牧は辰己の方角に当たる。方位がいいということで、横浜の財界人が住みつくようになった。元町などの下町に対して、ビバリーヒルズとよんだとか。

●世界の聖人八人が並ぶ、八聖殿

釈迦、キリスト、ソクラテスなど世界の聖人八人に八聖殿で会える。昭和八年に彫られた素晴らしい彫像だ。

●四二二回目を迎えた本牧神社のおんまながし

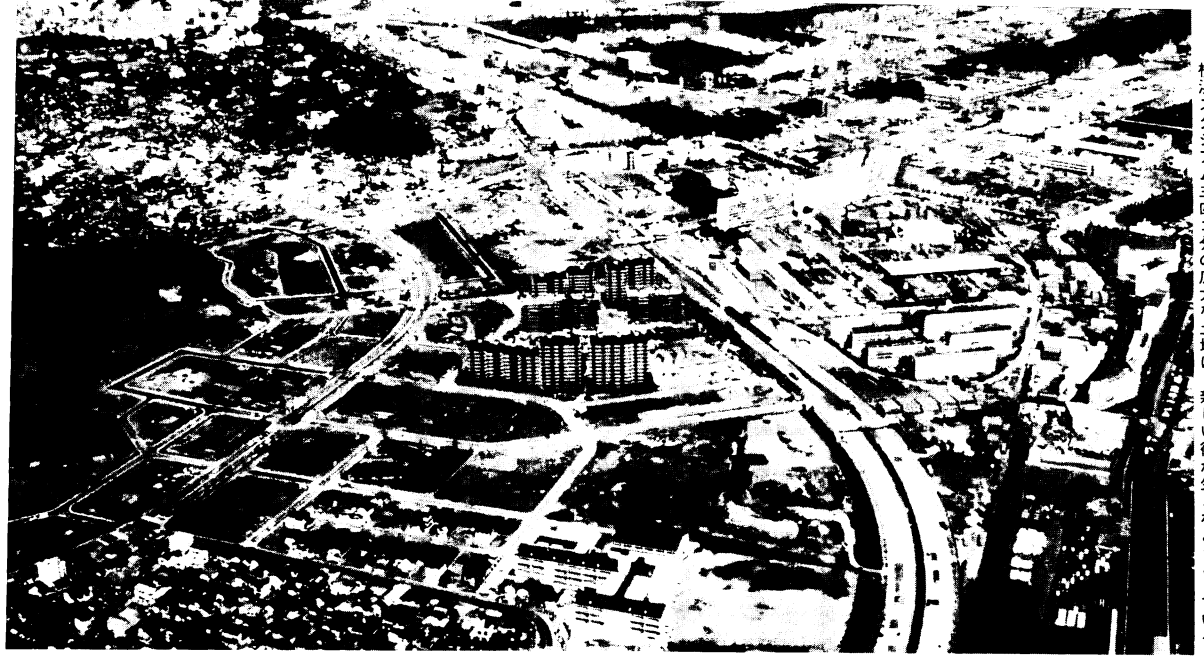
本牧神社の祭礼は、本牧町の羽鳥さんが、ワラで作った六つの馬を、一日目に本牧神社に奉納、二日目に沖合三キロまで運んで流す。この馬が本牧に戻ってくると不作になるといわれている。

●復活した本郷囃子

戦争で中断していた本郷囃子が復活して一〇年たった。本牧神社の祭礼では、揃いの半テンで町内をねり歩く。

●防空壕跡から三体の地蔵尊が出た

明城さんの庭先にまつられている三体の地蔵尊は防空壕跡から出てきたもの。誰がいつ彫ったのかは不明である。



横浜スタジアム三四コ分の広大な土地に、新しい街が生まれようとしている。

手に入ったからね。だんだん人情味が薄くなっていくみたいだね。」

確かに街の中は閑散としている。通る人影をチラホラ見かける程度。若者の姿はほとんど見ることができない。「本牧市民公園などは、雨の日を除いて若者がおしかけるようなんだけどね。街の中にも、若者が来てくれるようになるといいんだけど。やっぱり、横浜駅の方に行ってしまうみたいだね。」と商店主。

若者をよび戻すために、ジャズフェスティバルや本牧ふるさと祭りを行っている。だが、街全体の魅力づけはいま一歩というところだ。

本牧で商売を始めて四〇年という商店主は、「街全体に活気をもたせようというのが、ここに住む人全体の考えなんですよ。ひと昔前には、二業地があって、ネオンが輝いていたほどですからね。少し地味になりすぎたんですよ。もう少し派手な店づくりも考えているんです。」という。新しい街づくりと並んで、街全体の魅力づくりも行っていきたいというわけだ。

いかにも港町の、灼けつくような熱気が去って、この街は、三溪園や八聖殿に象徴される緑豊かな落着いた街へと変わろうとしている。商業地区、住宅地区、公園ときちんと区画された街が加わる予定だ。個人の住宅でも色を統一するような建築協定が進められている。区民のための公共施設も建設される。そんななかで、かつてのハマジル、ハマチャチャ、それからジャズにかわって、一体何がこの街の新しい熱気になっていくのだろうか。

多くのジャズファンを集めて、盛大に行われる本牧ジャズ祭。

根岸

下町・山の手・アメリカと三つの顔をもつ中区最大の住宅地

とにかく坂が多い。丘と谷が絡みあって、平坦な道よりも、坂道やそれにかわる階段の方が多いくらいだ。この街に暮らす人、三二一、三三三人。中区最大の住宅地である。

ただ、一口に住宅地といっても、ここには三つの顔がある。

西竹之丸や山元町のあたりは、谷の部分にびっしり家が建っている。車道から一歩はいると細い階段になる。人が二人通るのもやっとだ。路地と車道が入り組んで、家と家との間隔もまさに軒がふれあっている。

「ここは昔、船を修理して塗装する職人やお茶の箱づくりをする職人の街でね。ほとんどが着たきりスズメだった。葬式のときには、一つの羽織をとっかえひっかえ一〇人ぐらいで着たもんだよ。」

こんな光景も根岸ならでは。根岸森林公園で。

連合町内会長が語る
我が街の自慢・我が街の名物

●中国人だけのきれいな墓地

中国人墓地「地蔵王廟」は、中国人だけのお墓である。かつて根岸には大勢の中国人が住んでいたが、ここで死んだ人たちは、故国の風習で、遺体は棺桶に入れたまま、本国から来る船で送り帰した。墓は形だけで、中はカラッポである。

赤く彩られた地蔵王廟は見た目にも美しく、根岸の「歩け歩けコース」のひとつになっている。

●一〇の町が集まって大運動会

毎年一〇月の第三日曜日は、一〇の町の住民が集まる大運動会で、山元小学校の校庭はいっぺんに華やかになる。

この大運動会は今年で三一回目。年々参加する人の数も増えており、こんなに長続きしているのは、根岸の住民のコミュニティ意識が強いせいだといわれる。

●豪華絢爛、根岸競馬場の一等館

昭和の初めに天皇が行幸したといわれる根岸競馬場の一等館の室内装飾はさすがにすごい。当時の隆盛ぶりを物語る豪華さは、他では見ることはできないものだ。

当時の入場料は、一等館で五円、二等館が二円で、一等館での観戦など、一般にはとてもぜいたくな話で夢物語だったという。配当金は、大穴が出ても二〇〇円で頭打ち、二〇〇円を超える部分は、入場した人に還元したといわれる。

●山手外人墓地に次ぐ古い外人墓地

仲尾台中学校の下にある、根岸外人墓地は山手にあるのに次ぎ古い。いかに多くの外国人が根岸に住んでいたかを物語る話だ。

●牛頭天王社の夜店が復活するぞ

西有寺の通りにある牛頭天王社の夜店は、かつてすごいにぎわいをみせた。この夜店を復活させようという動きがある。根岸に楽しみがひとつ増えることになる。

昭和五七年にようやく返還された旧競馬場スタンド。

これは山元町の長老。「ここに住んでいる人はみんな親類みたいな感じだよ。」西竹之丸で聞いた少年の言葉だ。

根岸の下町の顔である。

一方、根岸森林公園を中心とする高台の方はどうかというと、「土地への愛着心が少ないのかな。土地を売って、他所へ出ていく人が増えているね。昔からこの土地に住んでいた人が、クシの歯が抜けるように姿を消していくんだよ。」

洋館や教会が建ち、アルファベットの表札もちらほら見えるこのあたりは、ちょうど山手の延長といった雰囲気だ。最近さかんにマンションが建設されているという。

「お互いの生活には干渉しないという暗黙の了解ができているみたいだから、新しくはいって来る人も、住みやすいんじゃないかな。」山の手らしいドライさがここにもあった。

根岸の高台は、その昔根岸湾を眼下にのぞむ風光明媚なところで、明治のころには外国人の遊歩道のメインスポットにもなっていた。特に根岸旭台の不動坂のあたりは絶景の地で、外国人の高級住宅街だったところだ。

「昔は、結核になっても、ここにいれば転地する必要がないといわれていたくらいでね。外人さんがまっ先に目をつけたところだよ。もう慣れたけど、何か自分の庭をとられたような気持ちが今でも残っているね。」こう老人が語るのは、現在中区で唯一残る接収地のことだ。

塚越、寺久保、簀沢の一部は、今も戦争が終わっていない。ここは米軍の住宅地。広い敷地に整然と大きな家が建っている。ぎっしりと寸分のすき間もなく立て込んだ他の街並と比べると、ここはまさにアメリカだ。

昭和五七年に、競馬場の観覧席の建物は返還されたけれど、そのほかの場所については、いつ解除になるのかまだはっきりしない。隣りにあるアメリカとのつきあいはまだ当分続きそうだ。本牧の基地がなくなってからはグッと減ったが、このあたりの商店街では、カタコトの日本語を話すアメリカ人とブロークンイングリッシュで答えるおばあちゃんの姿も日常茶飯の事である。

根岸八幡神社の祭りの日、この三つの顔が一つの根岸になる。かつては、「榊の祭」として榊の枝を組み合わせた神輿をシンボルに盛大な行列が街をねり歩いた。最後に海へ首まで入り、大漁、豊作を祈った祭りだ。今では榊神輿は恒例で行うことができなくなったが、それでも七基の神輿が街中を祭りに引き込む。街中の人のお盆の歳時記である。

人のつながり

街には大勢の人がいます。
でも、素知らぬ人が行きかう街は、たとえ大勢の人に囲まれていても
ひとりでいるのと同じぐらい
寂しい街ではないでしょうか。
しかし、街には見えない糸が無数に張りめぐらされています。
人と人を結ぶ糸です。
この糸をたぐっていくと、
老若男女、さまざまな人をつなぐ輪になって、一つの社会をかたちづくっています。
たとえば町内会、たとえばサークル活動、
主婦には主婦の、老人には老人の、子供には子供のそれぞれ社会があります。
一人が二人になって、二人が四人になれば、
その社会の輪も広がり、あたたかさ味も倍加するでしょう。
街の糸は街の血管。
人と人をつなぐ糸が大きく太くなっていけば、
血色のいい、生き生きとした街が生まれます。
人と人のコミュニティについて、街の中を拾い歩いてみました。

暮らしやすい街をつくるためには町内会の活動が大きな役目を果たすと思います。どんどん参加して下さい。

――自治会・町内会と地域の人たち

かつて全国の町には「隣組」というものがあり、同じ地域に住む人々の連絡機関として、大きな役割を果たしていた。

今は自治会・町内会がその役割を担っている。暮らしやすい環境をつくり、新・旧住民を取りまとめていく。

中区には、現在一二五の自治会・町内会がある。これを一一の連合会に統合させて、連合町内会長連絡協議会をつくっている。一一地区の連合町内会長が月一回集まり、毎日の生活に密着した身近な問題から交通網の整備といった大きな問題まで、いろいろなことを論議している。

連絡協議会会長の稲毛さんに町内会の現状について語ってもらった。

「残念ながら今の町内会が、住民の声を吸い上げ、完全に反映しているとはいえません。それぞれの地域でかかえている問題を拾い出し、突っ込んだ話し合いをしていかなければならないのですが。ただ、連合会は人の和をつくり、いかにして郷土愛を高めていくかが大きな役割です。人のあたたかさを伝える機関になればいいと考えています。」

それぞれの町内会では、いろいろな方法で人の和づくりを進めている。運動会、盆踊り、マラソン大会と住民参加のイベントもバラエティ豊かだ。

ちょっと変わったものでは、末吉町の落語会がある。これは毎年一回、町内のお風呂屋さんを借りきって行われている。

今年で二回目と、まだスタートして間もないが、住民の間にはすっかり定着したようで、開演前から会場はいっぱいになるという。老人もいれば、ジーンズ姿の若い人もいる。

浮世風呂とよばれて、かつては町内の対話の場でもあったお風呂屋さんが、新たな地域コミュニティの場としてよみがえったものだ。

末吉三、四丁目町内会長の三橋さんは言う。

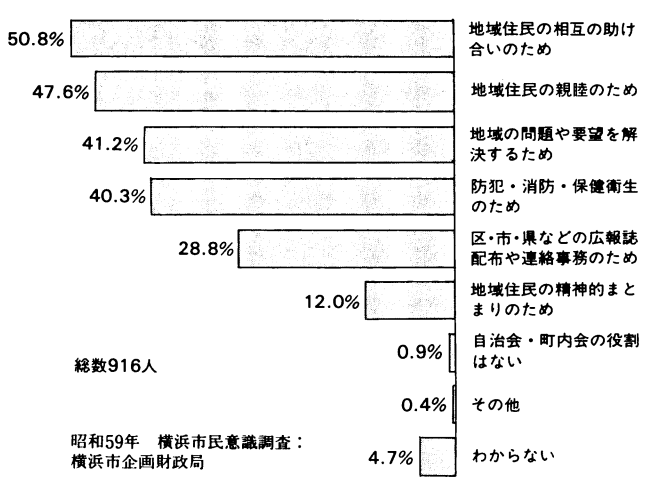
「自分たちの街だから、みんなでやろうという気持ちになれるんです。若い人と老人がいっしょになって楽しんでくれたのはうれしいね。それに他

データで見る中区の人々 Community Data Report

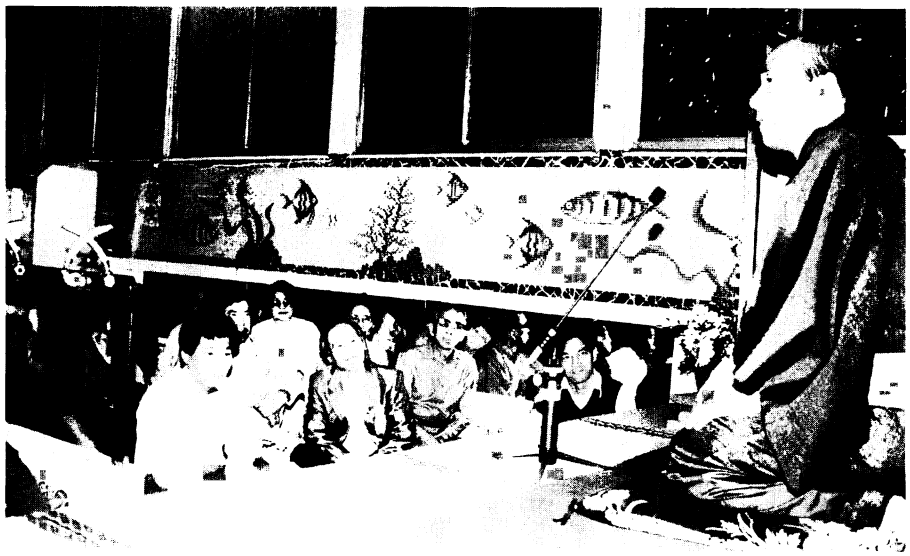
自治会・町内会の役割は地域のまとめ役

自治会・町内会の役割について、市全体の意識調査で見てみると、相互扶助、地域の親睦、問題・要望の解決、防犯・消防などがそれぞれ四〇%を超え、地域のまとめ役的存在として考えられている。中区では昭和六二年四月一日現在で九四・五%の世帯が加入している。

●自治会・町内会の役割は何だと思いますか？（複数回答）



昭和59年　横浜市民意識調査：横浜市企画財政局



お風呂屋さんが寄席に変身。末吉三、四丁目町内会の落語会。

このごろ、一人暮らしの老人が増えていますね。町内会でもお手伝いをしようと考えてはいるのですが…。

の町内からも大勢来てくれたからね。年二回にすることも考えているんです。」

ここでは落語会だけでなく、ハゼ釣り、餅つき大会、盆踊りなどと四季折々のイベントを行っている。特に二年に一度のお祭りは盛大で、他の土地に嫁いだ娘さんたちまでが、その日のために帰ってくるという。みんながこの街に愛着をもっているのがよくわかる。

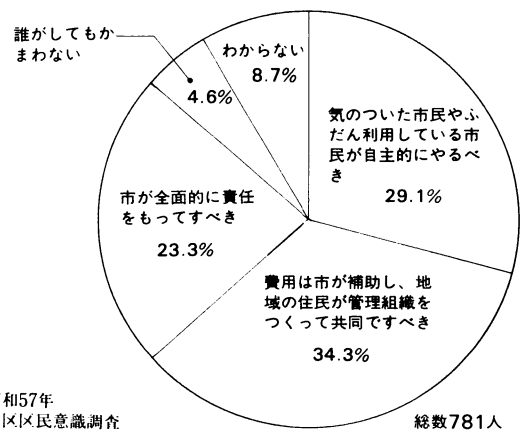
末吉町の例はほんの一例である。第六地区連合町内会のように今年で三一回目という大運動会を開く町内会もある。これだけの長期にわたって催し物が続くということは、町内会の活動が住民に必要とされていることのあらわれだろう。

生活に密着している街を、一つに取りまとめる町内会の活動は、今後ますます増えてゆくであろう新しい住民たちにとっても、より重要なものになっていくのではないだろうか。

地域の公園や子供の遊び場の日常的管理は誰の役割？

「市民が自主的に」「行政と地域が共同で」「行政が」という三つの考え方がほぼ同数を占めているように、地域の公園などの公共施設や樹木の日常的な管理はいろいろな論議をよんでいる。街づくりの基本的な問題だ。

●地域公園や子供の遊び場の管理（草とりや簡単な修理など）は誰がやるべきだと思いますか？



昭和57年
中区区民意識調査

総数781人

年寄りだからって、家の中にばかり閉じこもっているわけじゃありません。仲間同士、大いに楽しんでいますよ。

――老人たち

日本人の平均寿命がまた伸びた。女性は世界第一位、男性は世界第二位だと報道された。

それに若い人の減少傾向が加わって、高齢者の割合は急激に増加してきている。

一般に、六五歳以上の人口割合が七パーセントを超えると高齢化社会にはいったといわれる。これだけ平均寿命が伸びた現在、果たして六五歳が高齢者なのかという論議もあるところかもしれないが。

ともあれ、中区では昭和三〇年には四・一パーセントにすぎなかった六五歳以上の人の占める割合が、昭和六〇年には一〇・五パーセントとなり、高齢化社会が押し寄せてきたことは間違いない。

それによって、福祉や医療、年金などむずかしい問題もいろいろ出てきてはいるが、何よりも根本的に変わりつつあるのは、ライフサイクルそのものだろう。会社を六〇歳で定年退職しても、その後にまだまだ長い人生があるということだ。

こうした状況の中で、高齢者たちの生きがいはどこにあり、地域コミュニティの中でどのように活動しているのであろうか。中区で大勢の人が積極的に参加しているグループに、柏葉老人憩の家のダンスの会や北方老人憩の家の体操・レクリエーションの会がある。

それぞれの憩の家に行くと、時間を待ちきれないかのように老人が集まって来る。どの顔にも老人の暗さはなく、足取りもウキウキしている。

音楽に合わせてステップを踏む姿は、若者も顔負け、喜々としている。

今年七二歳になるという中島さんに話を聞いてみた。

「年をとると、足腰が衰えてしまうんですが、ダンスや体操で身体を動かしていると、衰えなんて感じません。それに何かの目標をもっていると、生活の励みになりますからね。」

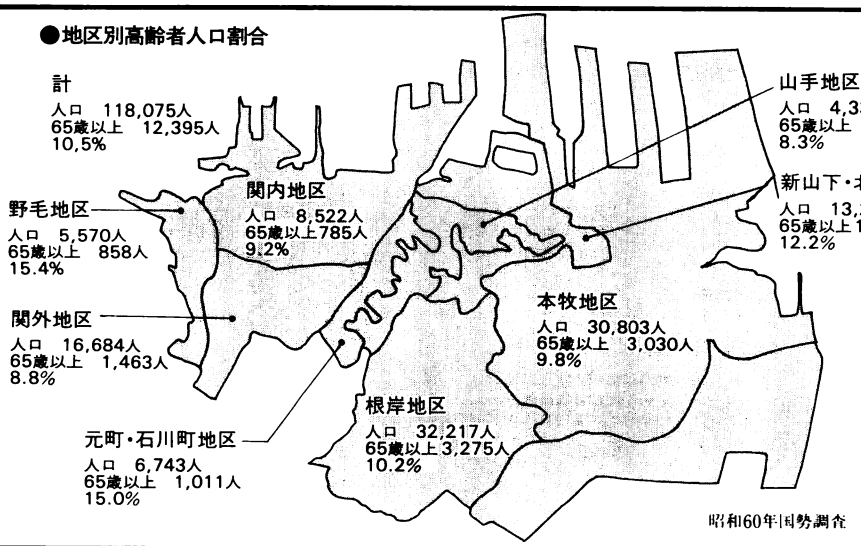
話す声にもハリがあった。その他にも、二、三人の老人に話してもらうと、「楽しい」「疲れなんて感じない」「気持ちがいい」といった言葉が返っ

Community Data Report

増え続ける高齢者人口

中区の高齢者人口の割合は、昭和六〇年一〇月現在で、一〇・五%。これを地区別に見ると、野毛、元町・石川町、新山下・北方の各地区で一二～一五%と高く、反対に関内、関外、山手地区では八～九%台と比較的低い割合にとどまり、本牧、根岸地区では約一〇%と中間的な状況である。

●地区別高齢者人口割合



昭和60年国勢調査

「あら、間違えちゃった」北方老人憩の家、体操レクリエーションの会。

ツ病の老人が仲間入りした。仲間といっしょになって話をし、身体を動かしているうちに、表情が明るくなり、笑顔を見せるようになったというのだ。この老人のことを中島さんは、「仲間といっしょにいるうちに、これではいけないと自分で思うようになったのでしょう。同じ年齢の人が元気にやっていることが、励みになり、生きる張りあいになったんですよ。」と語る。

老人たちは、身体を動かしているだけではない。音楽や読書もこなす。それも、ほとんどの人がかけもちでこなしている。

人生八〇年といわれる現在、老人だからと特別な目で見ることはおかしい。どんどん表に出て、身体だけでなく、心に刺激を与えることが大切だ。それも仲間意識をもち、仲間同士で刺激を与えあうことが必要である。おしつけではなく、自分たちが見つけた楽しみには、十分没頭するだけの情熱がある。

二一世紀に生きようという老人たちにとって、下手な遠慮や甘やかしは無用にしてもらいたいということである。

てきた。充実した老後生活を送っている人たちが多いのに驚かされた。

こんな話も聞いた。

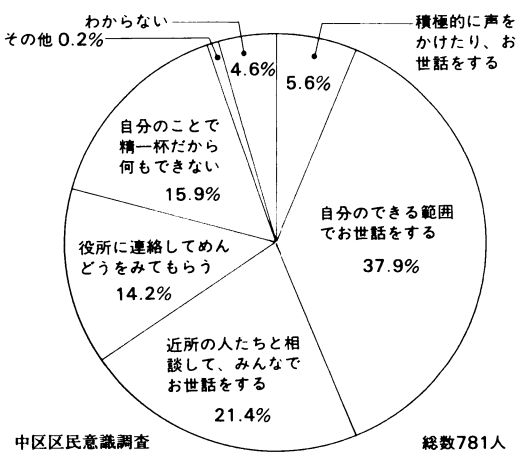
ある日、自宅にこもって外に出たがらない、ウ

それより、最近の子供たちの方がよっぽど心配だね。昔は、友達同士ケンカしながら育ったもんだけどね。

ひとり暮らし老人には「できる範囲でお世話」が四割近く

中区のひとり暮らし老人は昭和六一年一二月三一日現在で一、二八七人。高齢化社会において、ひとり暮らしの老人をどのように地域で支えていくかが、行政と区民が一体となって取り組むべき大きな課題となるだろう。

●ひとり暮らしで病気がちの老人が近所に住んでいたら、あなたはどうしますか？



昭和57年　中区区民意識調査　　総数781人

ボクたちだって一人より大勢で遊んだ方が楽しいよ。ただちょっと照れくさいんだ。

――子供たち

世界をとびまわって、子供の写真を撮り続けている写真家の田沼武能さんが、こんなことを話している。

「どの国の子供であれ、子供の原点は遊びにあります。遊びが生活です。子供の世界では、富める生活貧しい生活が問題ではなく、いかに心豊かに生活しているかが大切なようです。我々大人の価値判断で子供たちの夢の世界を破壊してはいけないと教えられました。」

田沼さんの意見は、今日の子供をとりまく環境をズバリ指摘しているといえる。

本牧青少年図書館に、子供だけの「かもめ座」という劇団があるが、そこには子供からよく電話がかかってくるという。

ここで子供たちといっしょに活動している松井さんは、そんな子供たちをあたたかく迎えるが、みんなうれしそうにやって来るそうだ。子供たちには仲間の交流がほしいのだ。テレビとかファミコンとか、たった一人の世界に閉じこもる遊びだけでは、満足できなくなってきたのだ。

学習塾に、ピアノ、ソロバンなどと時間を束縛され、学校と家庭の両方で完全管理されている今の子供たちは、本当の遊びを知らない。

そのあたりを松井さんに尋ねると、

「今の子供は遊びがヘタです。私がそこにいないと遊べないんです。目立ちたがり屋が多いのですが、学年が違うと話もしないんです。いい意味でのガキ大将がいなくなったことが原因でしょうね。」という返事が返ってきた。

たとえば、子供たちが決めた児童劇をやろうとすると、我も我もと主役をやりたがる。端役を割り当てると、とたんにつまらなそうな顔をするというのだ。

それも子供が悪いのではなく、思いきって遊べる場所も少なく、まだまだ学歴にこだわる社会風潮を生む社会のしくみなど大人側に反省しなければならない点が多い。

このような状況下で、「かもめ座」は中区の子供

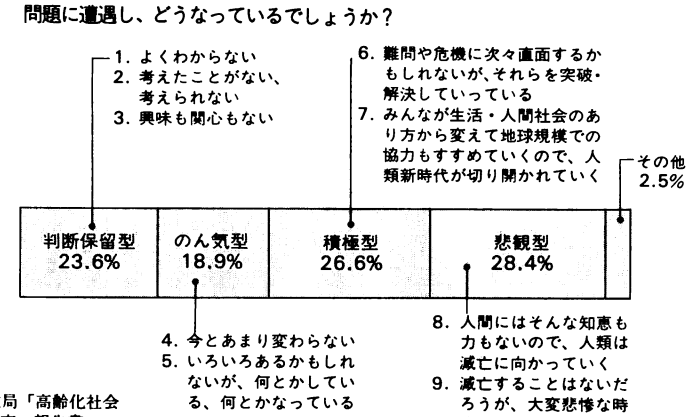
Community Data Report

子供たちから見る地球の将来は?

エネルギー問題や核の脅威など地球規模の問題対応が迫られているが、自分たちが大人になったときの地球についての子供たちの見方は、悲観型が約三割ともっとも多い。積極型二六%がさらに増えていくことを期待したい。

●市内の中学1年生550人に聞きました。

20～30年、40～50年後、地球規模のスケールでみて、みなさんはどんな問題に遭遇し、どうなっているでしょうか?



昭和60年　横浜市民生局「高齢化社会にむけた子供の環境調査・報告書」

たちにとって、一服の清涼剤になっている。今は幼稚園児から六年生まで二五人が参加しているが、いろいろな学校の子供がいたり、遠くから通ってくる子供がいたりして、子供たちの交流の場となっている。人形劇や児童劇を通じて、子供の輪づくりを進めているのだ。

年齢も地域もいろいろな子供が集まってきて、共通の目標を与え「ボクたちでひとつのことをやり遂げた」という喜びを味わわせる——この点に「かもめ座」の存在価値がある。

定例の発表会は七月の七夕と一二月のクリスマスということになっているが、それ以外にも外部のステージで発表する。みんなでがんばった成果として、ステージに上がった子供たちの顔は喜々としているという。学校でも家庭でも満たされない何かが、ここにはあるのだろう。

子供の輪を広げるためのイベントとして、毎年竹の子掘りがあり、今後は潮干狩りなどもやっていきたいという。最近ではこういった行事に母親も参加するようになった。子供の輪ができると、その波及効果は大きく、それは父母の輪に広がり、やがて学校の輪に広がっていく。

「かもめ座」のやっていることは、小さなことかもしれないけど、その目指すものは地域のワクを越えた大きなものに成長することだろう。

いろんな年の子と遊ぶとおもしろい。
いろんな国の子と遊べたら
もっとおもしろいだろうな。

自分たちでつくった人形といっしょに、ハイポーズ。

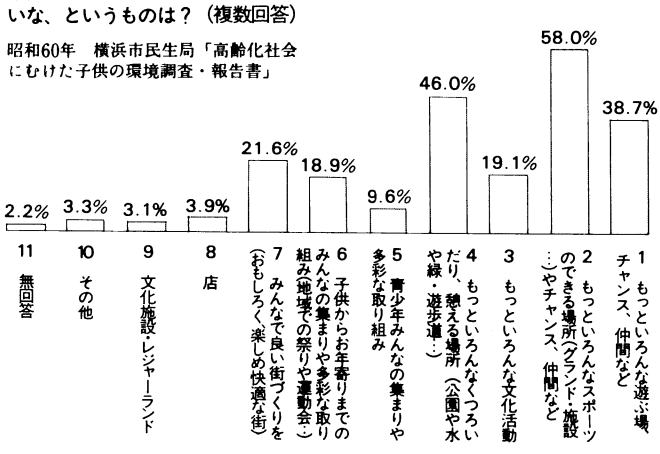
街にあるといいと思うものは、スポーツのできる場所が一位

あるといいと思うものは、スポーツのできる場所、くつろいだり憩える場所が一位、二位で、子供たちの自由な空間が減っていることを表している。また、住み良い街づくりへの取り組みが第四位にランクされている。

●市内の中学1年生550人に聞きました。

今住んでいる身近な地域に、こんなものがあるといいな、というものは？（複数回答）

昭和60年　横浜市民生局「高齢化社会にむけた子供の環境調査・報告書」



たとえ言葉がうまく通じなくても いっしょにやっていくうちに 自然に気持ちが通じあいますよ。

——外国から来た隣人たち

国際都市横浜は、外国との強いつながりのなかで発展してきただけに、その中心に位置する中区も外国人との接触をぬきにして、街を語ることはできない。

現在も、山手、根岸地区を中心に、多くの外国人が暮らしている。アメリカ、イギリス、オランダ、中国、韓国、朝鮮など五五カ国、約七、三〇〇人の人々がいるが、それ以外にも毎年多くの外国人が中区を訪れている。

一人一人の視野を広げていくだけでなく、中区での生活をより充実したものにするために、地域に住む外国人との交流は欠かせないだろう。

では、実際外国人の目から見て、私たちはどのようにとらえられているのか、聞いてみたい。

中区に住んで一二年になるというアリス・ハリントンさん。まわりの人はみんな親切だし、街も暮らしやすくて、横浜にはずっと住んでいたいと語るが、ちょっぴり注文もある。

「近所づきあいが、言葉の関係でなかなか思うようにならないことがあります。タクシーに乗ろうとしても、外国人ということで、みなさんとまどいます。片言の日本語でも話すと、とたんに安心した顔になりますけれど。私の子供たちは半年ぐらいで日本語をマスターできましたので、英語も小さいうちから勉強するといいですね。」

アリスさんは、朝日カルチャーセンターで英会話を教えているが、勉強といえばすぐに役に立つものをやろうとして、アカデミックなものを敬遠しがちな日本人の傾向にも疑問を感じている。

また、別の人の話だが、ある外国人女性が桜木町駅で道がわからずしょんぼりしていたが、通る人は誰一人として声をかけてくれなかったという。その女性は「日本はいいところと聞いていたのに、日本人は冷たい」と感じたとのことだ。

日本人のシャイな性格がわざわいしていることもあるが、私たちはちょっとした勇気を出して、彼らの側に飛び込んでいかなければならないだろう。私たちが外国に出かけたときのことを考えれ

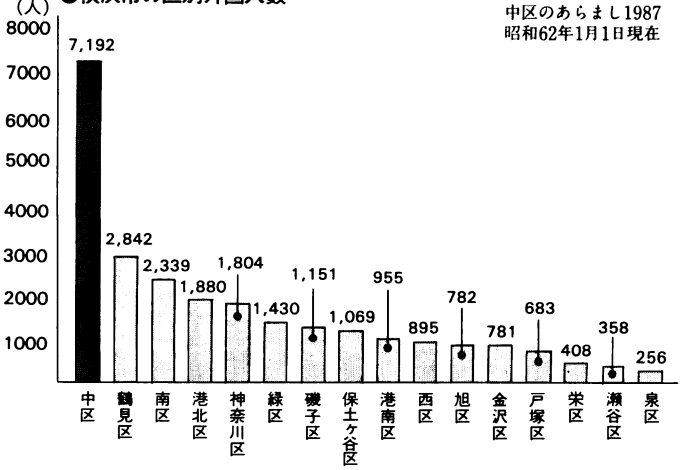
Community Data Report

中区は横浜市でもっとも外国人が多い街

昭和六二年一月現在の横浜市の外国人人口二四、八二五人のうち、約三割にあたる七、一九二人が中区に住んでいる。過去二〇年間の区内の外国人人口は、昭和四七年の八、一六二人をピークに昭和五六年まで減少を続け、その後増加に転じ現在にいたっている。

●横浜市の区別外国人数

中区のあらまし1987
昭和62年1月1日現在



唐崎さんを囲んで、ホームステイの学生たち。

「私の住んでいる中区を少しでも多くの外国人に知ってもらいたいのです。」

横浜YWCAの唐崎さんは、ホームステイで、外国人のために〝日本のふるさと〟づくりをしている。

唐崎さんの家には、学生、企業留学の人、芸術家、ヒッピーなどいろいろな外国人がいる。そのなかには自動販売機を初めて見た人、公衆電話がかけられない人など文明の程度もバラバラだ。

「なるべく同じ国の人は同居させないようにしているのです。母国語で話をしても仕方ありませんからね。宗教の違いなどむずかしい面もありますが、ここでは全部、私なりの生活を見せるようにしています。」

ここに滞在した外国人からは「日本のお母さん」という書き出しで、手紙が届くそうである。

唐崎さんは、人間同士のあたたかさが伝われば、異国であたたかい心に接することがどんなにうれしいものか、想像がつく。

このような例とは逆に、積極的に外国人との交流を進めている人がいる。

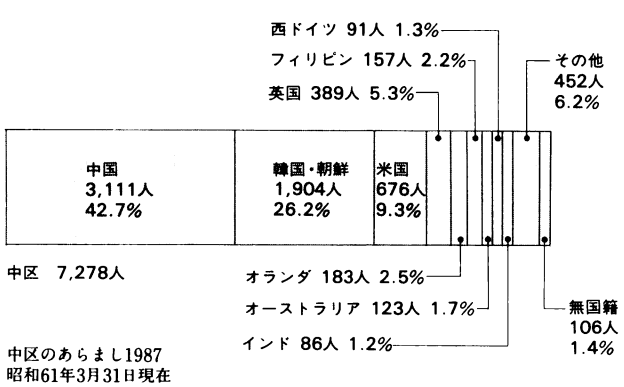
それでいいと謙遜するが、今のように人間同士のつながりが薄れている時代に、日本人外国人の垣根を取り払って、交流を続けている人が中区にいるのである。

日本の文化についていっしょに学ぶとか、サークルを通して主婦同士のコミュニケーションをはかりたいわ。

世界五五カ国の人が暮らしている

区内の外国人の国籍は、中国、韓国・朝鮮、米国をはじめ世界五五カ国にも及び、国際都市・中区を物語っている。また、外国人の割合が高い町ベスト3は、一位が三七%の山下町で、住民の二・六人に一人が外国人。二位は一六%の山手町、三位は一一%の根岸旭台である。

●国籍別外国人登録数



中区のあらまし1987
昭和61年3月31日現在

それまで知らなかった人とも同じ趣味を通して気の合う仲間に。世界が大きく広がりました。

――サークル活動を楽しむ人たち

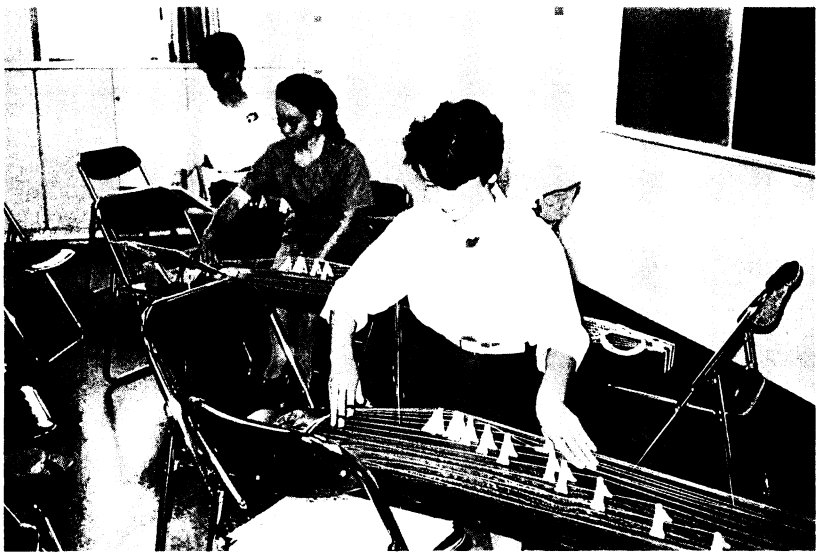
住んでいる町を最大限に利用する。これは家庭の主婦にとっても有意義なことだ。夫や子供だけに自分の時間をとられているなんてもはや論外、隣近所の井戸端会議だけでもつまらない。

主婦が生活の幅を広げ、心にゆとりをもつためには、その地域に住んでいる人たちと心の交流をはかることが第一だ。

そのためには町内会もあり、子供をブリッジとした母親同士のつきあいもあるだろう。だが、もっと楽しいのは、地域に密着したサークル活動に参加することではないだろうか。

知らない者同士が、共通の目標に向かって努力する。その目標が達成される過程で芽ばえてくる仲間意識が、充実した精神生活を約束してくれる。

中区の調査によると、区内に住んでいる主婦のほぼ二人に一人は、地域活動やサークルに参加しているという結果が出ている。地域活動やサークル活動が、主婦のコミュニケーションの手段としていかに一般的なものになっているかがわかる。



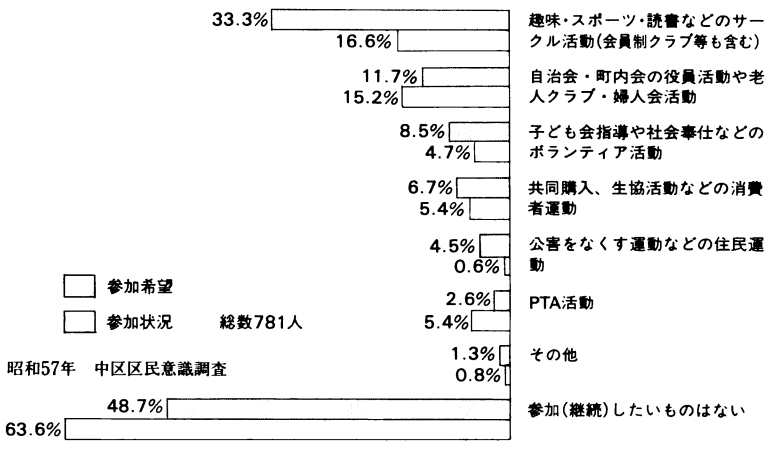
「なかなか思うように弾けなくて」野毛地区センターで。

Community Data Report

サークル活動の参加(継続)希望者は三人に一人

中区全体の三六%の人が何らかのサークル活動、地域活動に参加しているが、今後も続けたい、または参加したいと思っている人は五一・三%にも及んでいる。特にサークル活動は、現在参加している人の約二倍、全体の三人に一人が参加(継続)を希望しているのが注目される。

●現在参加している、または今後参加(継続)したいと思う活動がありますか？（複数回答）



今、主婦のサークル活動の場として、大きな役割を果たしているもののひとつとして、野毛地区センターをのぞいてみよう。

野毛地区センターは「ちぇるる野毛」の三階にあり、子供が自由に本を読むことのできるスペースをはじめ、囲碁、将棋もできるロビーがある。また、琴、茶道、華道、太極拳などに利用できる部室が備えられ、地域コミュニティの場としての設備が整っている。

木曜日にやっている茶道教室を訪ねた。

ある主婦は「この教室に参加するようになって、地域のことや住んでる人のことを知るようになった。いろいろな情報交換もできる。」とサークル活動のメリットを強調する。

昨年、野毛に引っ越してきた清水さんは「なにしろ初めての土地ですから、とても不安で仕方がなかったんです。ある方から勧められてサークルに入ったんですけど、近所の奥さんもいたりして、スムーズにこちらの生活にとけ込むことができました。」と素直に喜びを語ってくれた。

新しく地域の住民になった人にとっても、大きな助けになっているようだ。

地区センターの大藤さんの話を聞いてみた。

「住民の方のコミュニケーションの場として、かなり活用されてきました。皆さんの活動があまり活発なので、センターの自主事業から独自のサークル活動になったものもたくさんあります。」

太極拳、カラオケ同好会、木目込人形、書道、琴などのサークルがそうらしい。

このうち琴の教室をのぞいてみる。真剣なまなざしで琴の弦をつまびいていた主婦の一人は「とっても楽しいわ。時間のたつのが早くて。皆さんといっしょに練習していて、一曲弾けるごとに感動するの。何ともいえない気分ね。」と笑っている。

主婦のカルチャー熱は盛んになったといわれ、商業目的のカルチャースクールは大繁盛しているらしいけれど、身近なところにも自治体が進める地域のサークル活動があるだろう。

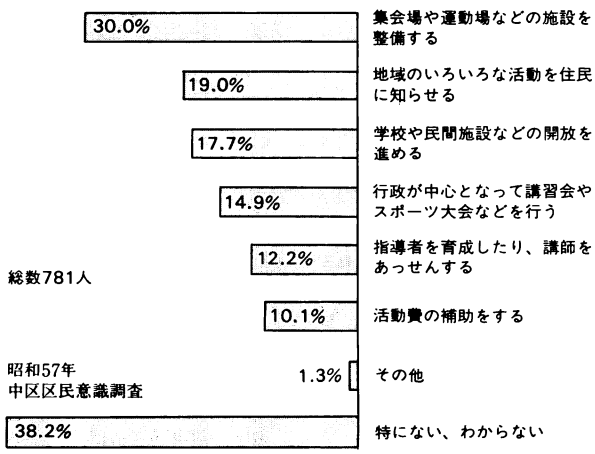
自分の住んでいる町でコミュニケーションをはかることが、家庭の主婦にとって、時間的な束縛からも逃れられ、情報交換の場としても、最大限に役立つものであるといえる。

今の若い人たちは、どんなふうに仲間づくりをしているのかしら。

サークル・地域活動での行政への要望は「施設の整備」が第一位

中区には全市的なレベルの文化施設は多いが、身近に利用できる区民施設が少ない。このため活動にあたっての困難点として活動場所をあげる人がもっとも多く、行政への要望も「施設の整備」が第一位にあげられている。

●サークル・地域活動を盛んにするために行政に望むことがありますか？（複数回答）



オレたちにはオレたちのたまり場があって真剣に街のことを考えています。

――青年たち

行動力と感性。いつの時代でも若者が武器としてきたものだ。明治維新とか歴史の大きな転換期はいうまでもなく、学園紛争でも、企業の中でもその力は発揮されてきたはずである。

昔からの社会のしきたりのなかでは、老人がすべてを取りしきっていることが多いが、新しい時代は若者の力を必要としている。地域コミュニティではすでに世代交代が盛んである。

一三歳から二八歳までの若者だけのグループ『濱(はま)じゃん組』をつくった竹森さんは、その代表格だ。音楽や演劇を通じて、若者の〝たまり場〟づくりを進めている。

「横浜は、刺激は多いが、働く場ではないんです。若者にとって、いずれは離れていくというのが実情なんです。地域のメディアをつくらなければ文化がなくなってしまうと思いましてね。」

『ハマジャンフェスタ』と名づけたイベントを打って六万人を動員したというから、その行動力には驚きだ。二年目は〝失敗宣言〟をしてこぢんまりとやったそうだが、来年はもう一度、大きなイベントを開きたいと、力強い。

こうした活動を通じて「熱をいれる若者が増えてきた」そうだ。ただ、残念なのは、いっしょにやろうという気持ちはあるが、先頭に立ってやろうという人がいないことだという。

竹森さんの言う〝たまり場〟がいくつかでき、一つの大きな輪となって活動するようになれば、新たな街おこしのパワーとして大変なものだ。

「横浜はよそから来た人の寄せ集めですから、風習やふるさと意識がないんです。それというのも、都市としてのアイデンティティーがなかったからです。若者にとっても、都市にとっても、〝たまり場〟づくりが必要なんです。」竹森さんは強調した。

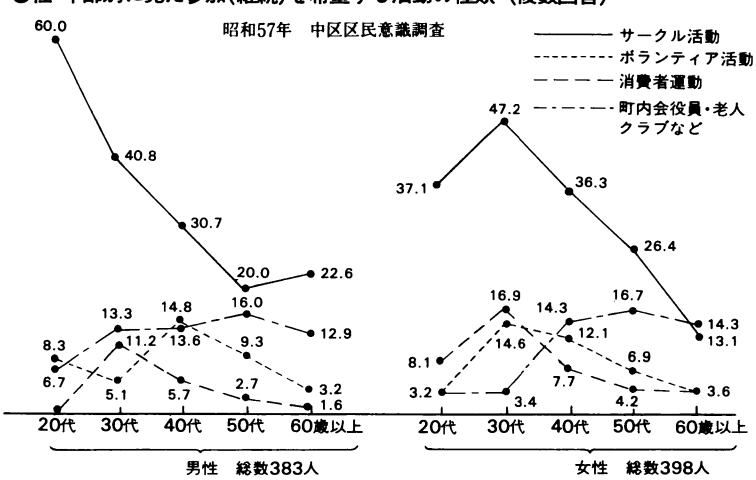
中区ジュニアクラブのリーダーである林さんは、「今の子供たちは、一人では遊べるが、大勢になると遊べないんです。大勢で遊ぶことの楽しさを教えてやりたいと思いましてね。」とジュニアクラブをやり出した動機を語る。

Community Data Report

青年層に多いサークル活動への参加(継続)希望

参加(継続)を希望する活動の種類について、性・年齢別に見てみると、各年代を通してサークル活動を希望する割合が高いが、なかでも二〇代の男性、三〇代の女性の参加(継続)がきわ立って高くなっている。

●性・年齢別に見た参加(継続)を希望する活動の種類（複数回答）



パワーあふれる濱じゃん組の面々。

ジュニアクラブには、中学、高校生を中心に二〇人ほどが所属している。

「キャンプなど野外活動が中心です。キャンプとなると、子供たちの目が輝くんですよね。ぼくもいっしょになって楽しんでいますよ。」

マッチがすれない、包丁が使えないという子供たちに、あえて挑戦させる。今まで知らなかった部分を、体験を通じて知ってもらいたいと考えるからだ。

「皆が集まって、一つの目的に向かって突き進むことがいかに大切なことかを体験してくれればいいんです。そうすることで、自分が何をすればいいのか、自分の役割が何か、ということがわかってくるはずですからね。」

林さんは現在大学生である。中高校生ともあまり年齢差がない。そんなところも、中高校生を魅きつける要素になっているのだろう。

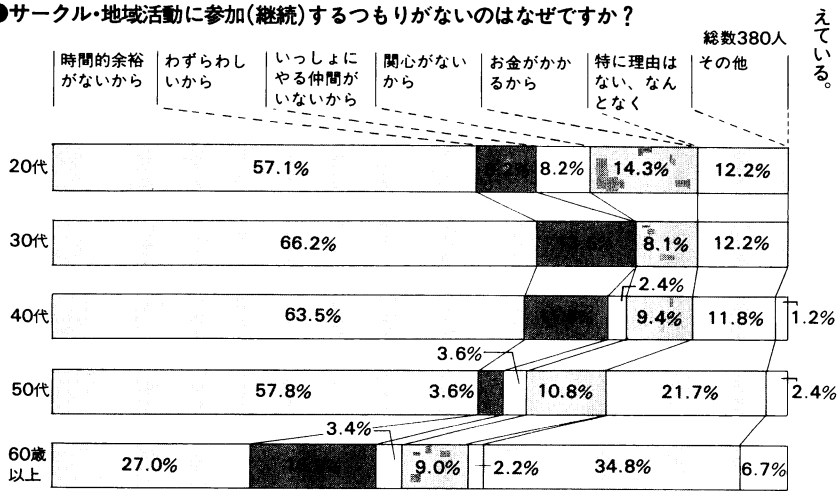
イベントや野外活動を通じて、若者のきずなはどんどん強くなっている。こうした動きが、中高年者たちの、ある意味で街の活性化を妨げているワクにはまった考え方を変えさせていく。これからの地域コミュニティにとって、若者の柔軟な頭脳は絶対必要なものとなるだろう。

若い者だけでかたまるのではなく、いろんな人の輪をつなげて街をつくっていかなくちゃね。

サークル・地域活動に参加しない理由、第一位は、「時間的余裕がないから」

サークル・地域活動に参加しない理由の第一位は「時間的余裕がないから」だが、第二位の理由は二〇代では一四・三%の人が「関心がないから」、三〇代では六〇歳以上の人たちに次ぐ一三・五%の人が「わずらわしいから」と答えている。

●サークル・地域活動に参加(継続)するつもりがないのはなぜですか？



データで見る中区の人々

Community Data Report

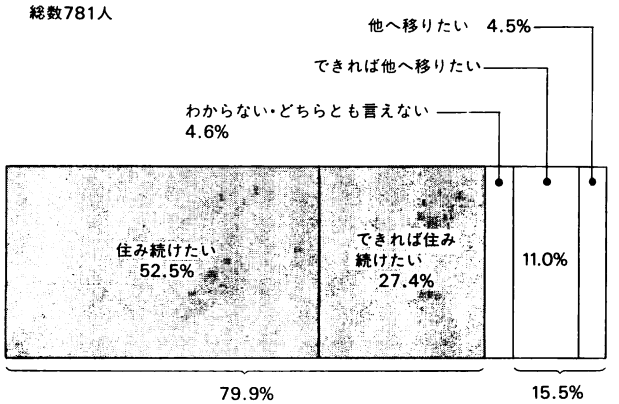
八割にものぼる定住意向

「できれば住み続けたい」という人も含めると、七九・九%の人が現住所への定住意向を示している。その理由としては「長年住み慣れている」「交通の便が良い」ことが多くあげられている。定住意向は年齢、居住年数に比例して強くなり、特に五〇歳代以上では九割を超える人が定住を望んでいる。

一方、他へ移りたいと考えている人は約一五%で、その理由として過半数の人が「住んでいる家に不満」としている。

●中区民の定住意向

総数781人



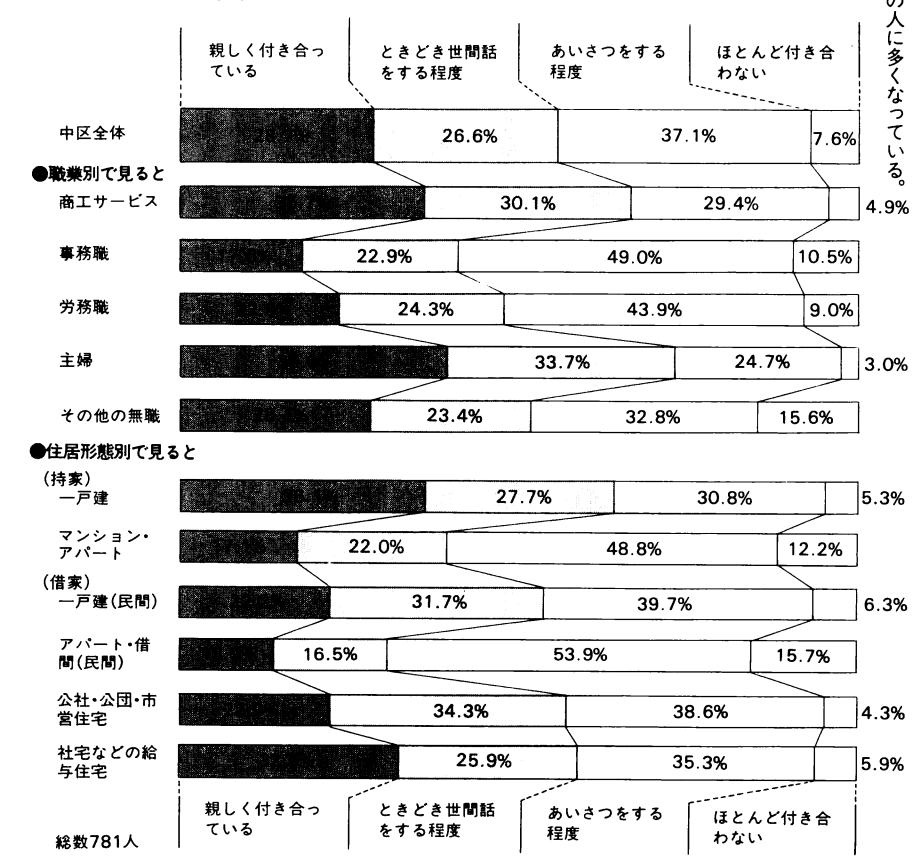
昭和57年　中区区民意識調査

親しい近所付き合いをしている人は約三割

中区の人の近所付き合いの程度は、親しく付き合っている人が二九%、世間話をする程度の人が二六%で、四五%の人はあいさつ程度の付き合いか、ほとんど付き合っていない。

これを職業別、住居形態別に見ると、親しく付き合っている人は、主婦や商工サービス業の人、持ち家一戸建と給与住宅の人に多く、逆にあいさつ程度かほとんど付き合いのない人は事務職の人、民間アパートや分譲マンションの人に多くなっている。

●近所との付き合いの程度



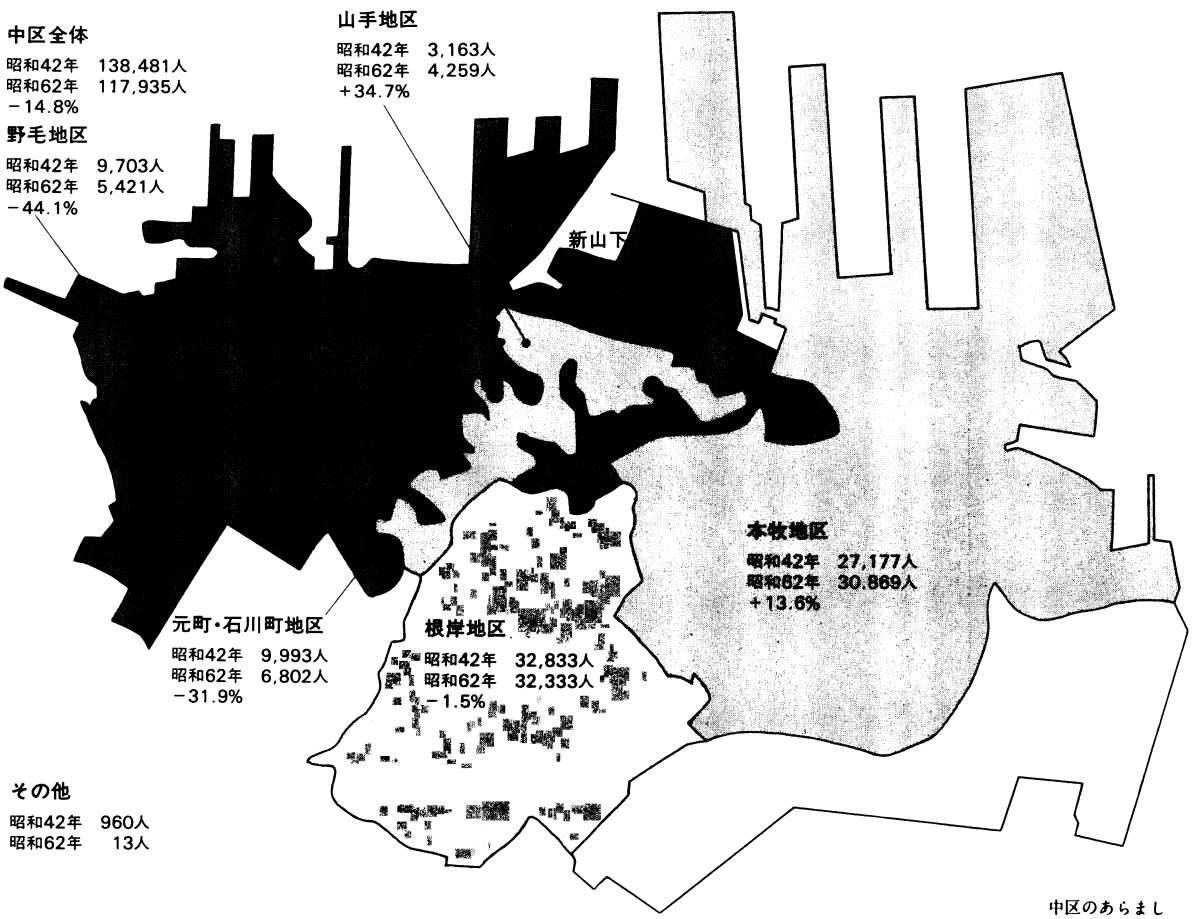
昭和57年　中区区民意識調査

中区の人口は二〇年間で一五%も減少

高い定住意向にもかかわらず、中区の人口は昭和四二年の一三八、四八一人から、昭和六二年一月現在の一一七、九三五人と二〇年間で約一五%減少している。

ただし地区ごとに大きな格差があり、関内、関外、野毛地区など都心部では約三〇%も減少し、特に野毛地区は、四四・一%と非常に高い減少率を示している。一方、住宅地側では、新山下・北方地区を除いて増加あるいは横ばいで、なかでも山手地区は三四・七%と大幅に増加している。

●地区ごとの人口増減の割合
(昭和42年10月1日〜昭和62年1月1日)



中区のあらまし